

随想

生き物を飼う

株 P P Q C 研究所 加藤 宏光

中国出張から帰った翌日、孫が遊びに来た。先月は、X ショットという特別っぽいガンに、その前は進化型ベイゴマ・ベイブレードに凝っていた。X ショットというガン(銃)を駆使するヒーローが活躍する短編ドラマや、ユーチューバーという新種(とはいつてもすでに下降線をたどっているともいわれる)が自分を主人公として、単純な展開のドラマ風の演出が YouTube で見られるし、また進化型ベイゴマ(ベイブレード)は、遊ぶ方法は従来のベイゴマと同じ要領であるが、何しろ高額である。ちなみに鋳物でできている《古典的ベイゴマ》の価格は一〇個ほどで数百円であったが、ベイブレードでは一、〇〇〇円ほどのモノが最低価格であ

り、高価なモノでは四、〇〇〇円から五、〇〇〇円もする。子供の購買欲を掻き立て、高額な玩具を売り、それをゲーム化することでさらに市場を広げている点では、うまいものである(著書の感性では、必ずしも是とはしないが:)

そんな彼は、今日は「カブトムシ」「クワガタムシ」に興味津々となっている。母親(著者の次女)が捕まえた小さなカマキリを虫籠に入れて、毎日何処へ行くにも持ち歩いていて。このカマキリは彼の母親(著者の娘)が家へ迷い込んだところを捕まえたらしい。

もので、小さなハムの切れ端にしがみついてひたすら食べている。その姿はまるでペットさながらである。その他にクワガタ虫も飼育している。このクワガタ虫は、著者のラボ(PPQC)で、トラップに掛かったものである。三匹の雄と二匹の雌が同居している。彼は幼いころには花を始めとする植物が大好きで虫については、どちらかと言えば怖がっていた。六歳にもなると、色んな面で成長するものである。

すべてが商売ネタとなつてい現在を改めて実感した。著者の子供の頃には、すべての昆虫類を自然のなかで見つけ、捕っては飼育したものである(もつとも、カブトムシ、コガネムシ、クワガタムシ等については、毎日手に入るため、敢えて飼育したことはない)。珍しいモノでは、玉虫がある。「玉虫の厨子(注)」で知られる、あの七色の輝きをもつ「玉虫」である。そういえば、玉虫色の決着等という表現はいまでも使われる。本来の玉虫の色を知らずにこの表現を使っているマスコミ人もいるのではないだろうか? 六〇年近く昔であっても、玉虫を捕まえることは滅多になかったため、たまたま捕まえたなら、まずは学校へもつて行って自慢の種にした

ものであった。現在、著者のラボで見られる昆虫はカブトムシ、クワガタムシ、コガネムシの他にカミキリムシ、意外なモノとしては蛭が挙げられる。地方都市といっても、その都会化ぶりには凄まじいものがあり、街中で蛭等を見かけることはまずあるまい。

も YouTube 等を通して、「鬼滅の刃」や「ポケモン スター」の世界に浸り込んでいる姿をみるのが多かった。生まれた時から、YouTube があり、その環境下で繰り広げられる仮想の世界で、キャラクターと一体化した自分をヒーローとして参入させているのなら、それでいいのだからか!? 等と感じることも多かった。昨日、生きた昆虫と生活することに興味をもっている彼の姿は、大人の考えるよりずっと柔軟な感性ですべてを受け入れてくれるのかもしれない。

世界の文化遺産であるから、町全体がヨーロッパの城とそれを取り囲む建物で満ち満ちている。そこで乗ったタクシの運転手が嘆いていた。『最近の若者は、こんな田舎町には興味がなく、華やかな大都市へと流出してしまふ。だから、この町も過疎化への道を歩んでいる』と。

することはそう容易いことではない。易しくないから、大都会から田舎へ移住した人のことがテレビ等で紹介される。当たり前に行えるのなら、それを取り上げたテレビ番組等だれも見ないだろう。できないことへの憧れで、家庭菜園を楽しむ人がいるのではないのだろうか!?

子供の成長は早く、六年前には全くの白紙であったその脳に、虫たちの成長を確認するほどの高度な知識が蓄積されてきている。「自分のカブトムシの幼虫が一番先に成虫になったんだよ」と母親に自慢していたらしい。幼虫が成虫へ変体することを、飼育を通して学んでいることは、教育の成果である。

著者のラボのある場所は、岳温泉という鄙びた温泉町のある福島県二本松市である。都市化の激しいわが国であっても、田畑や山郷に近い田舎であれば、まだまだ、自然に繁殖・生息している動物が少なくない。問題は「そのような生物に馴染もうとする心の喪失」という、人間側の変化であろう。

自然界の魅力は都会の刺激的な魅力に比べると、若者世界を引き付ける力は強くない。刺激を求める若い世代を引き留めるには、自然界の魅力に気付くのは、相当度に年齢を重ね、刺激に対しての免疫を得た世代である。このように年を重ねて、自然界の魅力に目覚めた人々が田舎へ移住

(注)「玉虫の厨子(たまむしのずし)」は、奈良県斑鳩町の法隆寺が所蔵する飛鳥時代の厨子。装飾に玉虫の羽を使用していることからこの名がある。国宝に指定されている。